

彩雲

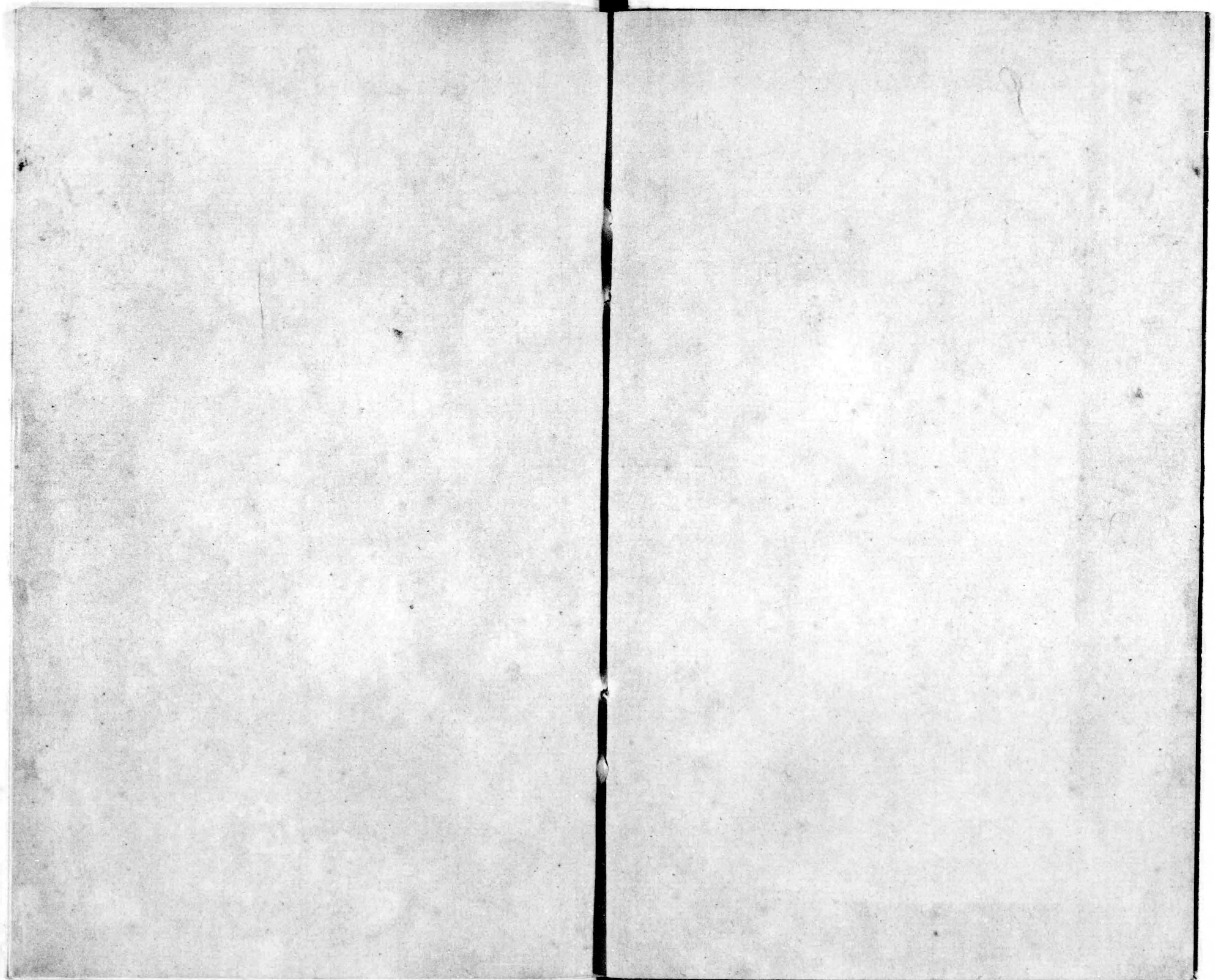
特 102  
473

~~978~~  
~~978~~

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始





特102  
473



草

楠  
田  
敏  
郎





春郊小景

初夏の野の草を素足に踏みて立つうらうら身さへひかる心地に

戸山ヶ原の夏なほ淺き草を籍きいまははるかにしのぶ君かも

麥畑に陽はいつばいにあたりをり寂しさにわがいをぐなりけり

さびしさの一圓につのり走るとき光りて落つる鳥のありけり

麥の穂の穂なみのはてにかがやきて一筋の河ながれたるかも  
女ゐて青麥ばたに立ちばなしなせりけるかも春陽うららに  
青麥の畑かがやき春光に草採るひとのちいさなるかも  
わかぐさを素足に踏みて立つひとの素足かがやき春の陽は燃ゆ

妙子に

天の星ひかり失ひ地に墮つとあどるころに抱きたりけり  
きみが唇によれし盃たまと抱き小夜更けの街をあゆみ居るなり  
春すぎて夏きにけれど紅椿いまだも咲きて陽にひかりたり  
うれひつつくだる坂みち陽に白く椿が二つ落ちて居るかも

紅椿

初夏の陽のひかりのなかの紅椿いまはあはれに残りたるかも

悲しき運命を持ちて兒は生る

父を父とはれては呼べぬ身をもちて彌生のそらに子ぞ生れたり  
生聲<sup>うぶこゑ</sup>たかく啼く子を見つつ人間の悲しき生命<sup>いのち</sup>もひ入るなれ  
眠りたる兒をば抱きつうら若き母こそなげけ悔いのところに

砂糖湯を子に吸はすとして小夜更けの火鉢の火をばかき立つるかも

つぶら眼をばつちりひらき春の陽のひかりのなかに湯あみしてけり

湯をよろこび小さき手足を振り居つつ子としおもへば憎くはあらず

湯あがりのタオルに巻きし子の肌に匂やかに春の陽が燃ゆるなり

子は死にゆけり

つぶら眼はいまはひらかずいだかれて死せるとも無き姿なるかも  
淡雪の降りて消ゆるにはかなさの似ずやと妻は死兒をぞいだく  
これやげに親子一世の別れぞと子をばひつぎに寝させけるかも  
子のひつぎ抱きてのぼる坂のみち落ちし椿も踏みがてにすれ  
子のひつぎ墓にうづめぬ土くれを落しもかねつ吾は父なれば

子のひつぎ土にかくすとその父は涙ながらに鍬もちてけり  
春の夜の蛙のなくを聞きて居つ死なせてやりし子をおもふなる  
ひとりしていゆく旅路のさびしさを語りて妻は正體もなし  
春の雨死にし子のためたらちねの母は手向けの乳をしぼるなり  
子を死なせし妻がさびしく乳をしぼる姿かなしみ小夜床に居り

雀の子

屋上に雀の子らはあそび居り春陽まぶしくひかり散るかも  
しづやかに春のひかりをかき亂し雀の子らは屋根にあそべる  
春の空とほくけぶらひ一列の並木のはてに燃ゆる落日  
裸木の梢をそめて沈む陽のおほきなるあり逢ひに來ぬれば

妻の眼

夏密柑むきて居につつわが妻はふつと寂しき眼を見せにけり  
子を生みし女の眸さみしけばあはれになりて抱きけるはも

野の兵隊

一もとの野木をかこみて兵隊は銃をくみたり入陽のあかさ



夕陽のなかに揺れてかがやく樹のありて兵隊はいま休み居るなり  
いちにんの兵士夕陽に目蔭しつ遠きけぶりをながめ入るはや  
野のはての樹影を染めて沈む陽に見入りてひとは動かざるかも  
野の草の青きにじつと眼を落とし兵隊の身をなげくかひとは  
いばらの花白く光れりこれやこの野のひとつ家に人住まざけり

萱  
草

夏の陽はくわつと燃えたち萱草はいよいよ青くしづもりにけり  
萱草のしげるところに陽の落ちていよいよ青く光りたりけり  
青萱は夏の小川の川岸にたけのびてゐて風にふかるる  
夏川の川端に来てくわづばの四つ葉をさがすわれと悲しく

たれ故に四つ葉つけたるくろくばは尋ねるものぞ夏の川邊に

街の柳

くもり日の街の柳はたれ鎮みをんなふたりのたちばなしかも  
曇り日の山門に鳩むれてゐて青葉しつとり垂りにけるかも  
おほきみの宮居の堀のほりばたの柳に夏の風ひかるなり

かもめ

雲おもく垂れしづみたる海のはて啼かぬ鷗ぞほのかに渡る  
磯ちかき波に浮きつつしづみつつ一羽のかもめあそび居にけり

梅の實

茂り葉の葉がくりにゐて梅の實はつぶらに育ち夏ふかみかも

紺青の空のもとなる禿山に松四五本ぞ光りたりける  
岩かけの草がつけたる黒き實をちざりては棄つさびしき心に  
野におほさく雲が投げたる陰影のうごかずわれは涙を流す  
わが悲しみのゆきて迷へる姿とも夜空にひとつ雲のうごかず

ひまわり

別れきてひとり住む身にかゞやかに日向葵さけりわれ堪へられず  
陽のなかに日向葵は渦を巻いて居りこらへかねたるわが心かも  
茂り葉の葉かけに夏の海見へて街にほのかに灯のともりたる  
停車場の柵の向ふに夏の海ひかるを見たりくもり日のもと  
夏の野のあなたにけぶる大樹ありてほのかにあかき雲流れたり

くもり日の海に立つ波をりくは白く光れりいまだ眼に見ゆ  
庭の松ひかりしづもり松の葉に足たれ蜂がとまり居るかも  
氣違ひの姉の眼をしも思ひつつしつかりと麥の穂をつかみたり

夏  
日  
賦

谷  
元  
知  
安

旅

島かげに船は消えさり島かげにかゝる煙の陽にかゝやくも

玉投らば玉やころころまるばなん海面はだらに白雲のはゆ

風うなり浪また音を高めたりいねがての夜のひとりさみしき

大浪は白き穂を生み白き穂は陽にかゝやきてかさなりよすも

目路のはてはるかに浮ぶ釣り舟の焚く火の見えて夕さりにけり  
濱千鳥濱にをりたち砂あさる小さき足に陽のかゝやくも  
いつしかに砂濱のはてにきてありぬかへりみすれば屋並かなしも

長き旅

大天に彩雲かゝりうごくなく水田ははやもあけそめにけり

君ははや目をさましつらん春の夜のゆめにもひとは遠退きにけり  
ときわ樹にとりかこまれし一軒家灯かげゆらぎつ遠退きにけり  
近よれば雪はますますかゝやきて山肌寒く見えわたるかな  
沈む陽の光をうけて帆のかげに梶取はほいほい風よびてあり  
ふり仰ぐつくしの山の山すがたひとは涙をこらへかねつゝ

くぬきの葉は枯れてもおちず梢にありてさらさら天をならすなりけり

古郷にて

月照が身をなげし海の海近く赤き椿の花咲きてあり

手をのばし赤き椿の花折りぬここは古郷古郷の山

古郷の山にのぼれば古郷の海が見ゆるなり遠きをとめよ

ひとりして歩む砂濱古郷の海はしづかに音にいてにけり

ひとを迎へに

山かひの竹の林をとびいでし鳥のゆくてのはるかなるかも

山かひを走れる汽車のはくけむりときわ樹の葉にゆらぎやまずも

窓をうつ雨のしぶきにぬれやせむ古郷近く汽車はきにけり

みなそこを小魚泳げり時折はましろき腹の陽に光りつつ  
わが立てる荒磯めぐりてさしきたる潮のかほりのしみじみあはれ  
入りつ陽の光ながれて舟あかしさざなみ赤し屋の上赤し  
あの山は陽の入る山とながめたりほのぼの紅のけぶりたるかも

ひろびろと空にみなぎるかなしみを尊きものに見て立ちにけり  
音もなくあけの渚をとぶかもめ青風き吹けばうちしめりつつ  
海こひて海に來にけり砂濱の二つの影もかなしみとなる  
海の上をとびしかもめの陸へきて大根畑の上とべるかも  
沖さしてかもめはとべり漁夫の妻ひつそり濱に舟待ちわぶる



春七首

春の夜の雨はしづかに音にいてて草にたまらすふりそそぐかな  
雨の中草はしづかにふるへつつうらがへりつつ光るなりけり

もぐらもち

かなしきと云ひもはてぬにもぐらもちむくむく土をかつぐなりけり

土のなかにまひおどるらむむくむくと土かづきつつもぐらかなしも  
春の野の畑の黒土陽をふくみもぐらむくむく走るなりけり

畑

ゆきあへる斜面の畑は陽をふくみほのぼの麥ののびてあるかな  
霜柱崖ゆほろほろ音立て、落陽のなかをころがりてきぬ

来るひとをいく日待たなむ丘の上の櫻の花もちりそめにけり  
別れても思ひあかじとつげこせよ南のはてにすめるをとめご

並び生ふる杉の大樹の梢高みほがらほがらに雲ながれくも

麥の穂の濃青のゆるる野のはてに五月幟の流れ光るも  
空わたる鳥もありけり初夏の原の小草の青深みかも  
ふみしむる初夏の野の青草はいよいよ青く光るなりけり  
ひとゐずば何處いなまむをとめごのふみし小草をふむべかりけり  
しんしんと生ふる杉むら若芽ふき日にしんしんとのびにけるかも

ゆれゆるる大樹のかげをわがふめり大樹のかげのゆれやまぬかも  
今夜の月のあかるさ家近く鳴く鳥もゐて月のあかるさ  
瘦しき雲湧きいづる山の秀ゆいよいよすみて月のぼりくも  
夏ふかみ青葉のなかに住む鳥のころとわれもいまなりにけり  
茂み合ふけやき若葉のてり光りいまは消えたる日かげをおもふ

外燈の光ほのぼのしみわたり雨降る夜の草あかりかも  
ふくろうは何時迄なくぞ身もしぬにわが家こひしくなりにけるかも  
一羽なき二羽なきすればはるばるときなくふくろのかずまさりけり  
夕されば鉢のまそこに金魚むれかがやかにしてうごかざるかも  
あらざらむ事をおもひて鉢なかの金魚に牛乳をのませけるかも

小夜ふけにふともめざめて見にければ金魚はふかくねむりたるかも  
夏の日の光のなかにくだかけはこゑほがらかになきにけるかも  
赤ければいちごはよしも唇にふくみてしばしはみがてにけり  
うつうつとうごかぬ森のなかしゆけばうごかぬさとわもなりにけり  
音たてゝ風になびける萱の葉の青ければなほ光りたるかも

秋

ほてり頬をしのびかにしもふくからにほから秋風いとしまれぬる  
秋草にうもれていねし夕べぬの香のうせぬ間をひとりゆかばや  
まつもよし秋草の上に身を投げて仰げば空ははてなかりけり  
やはらかき汝が頬にふれてひるがへるほそきくろ髪わがめづるかみ

さりげなく電車の窓に見て通る櫻紅葉にはゆる陽のいろ  
樹がしらを風は流るれさやかなる空には月ののぼりそめたり  
くもり日のもとにかがやくときわ樹の葉をならしつつ風渡るなり  
焚火するけむりおぼしくときわ樹のかゞやける葉にかゝるなりけり  
ひと葉さへあらぬ木梢に小鳥さなきうらうら胸毛かゞやかしけり

をちここにまばらなる灯のかがやきを霧のま底に見入りたるかも  
雨雲は低くたれたり雲の上に月かゞやくと見ればかなしき  
秋風にまへる木の葉のかろさよりなほはかなくも悔ひやまぬかな  
さくらの葉をとなくまひてちるひまをほそぼそ雨のかゞやきて見ゆ

夜ぎり降る森の深みのうすじめり落葉にこもりこぼろぎのなく  
うす光る水にすがたをうつしたる冬の大樹の梢高みかも  
さやさやに空はうごきつ枯すすきみな一方になびさけるかも  
まはだかの木ぬれたわわに積る雪光の見えて朝あけにけり  
ぬば玉の夜の川瀬の音さむみ雪はしらじら光るなりけり

## 暗路

ぬば玉の夜の川瀬の音さむみ雪はしらじら光るなりけり  
なにものか光る心地にゆく暗路しんしんとして大樹は立てり  
何方ゆ人のけはひす並びたる墓ゆるぐがに人のけはひゆ  
まさやかに大樹のゆるる音を聞けり大樹の梢のいや高さかも

山里ははや蚊を見たり人間の血を吸ふものの叫びをきけり  
あしびきの山は緑し深ければ入りがてにつつ遠見するかも  
ひとりゐて山の奥所に鳴く鳥のこゑをし聞けど汝をわすれめや  
むらさきの藤のたり花咲きさがり天の光もむらさ染むる  
久々にしのぶ父かもとこやみに顔いだしませこゑきかせませ

草

笛

嗟

峨

秋

子

春の光 二十五首

春の光肌なめらかにてりそへば遠居のひとのしみじみおもほゆ

おほらかに春立ちそめて若草は光のひまに萌えいてにけり

群青のややくれゆく春の宵ひとすぢの雲かゞやきてあり

あらはなる枯草原の一本木眞土は春の匂ふなりけり



遠空ゆ春の東風吹きくれば樹々はしづかになびきけるかも  
青々とすめる大空を春の雲すがたたをやにながれけるかも  
芽ばえせぬ森の木ぬれに春の鳥ちちと鳴く音のみのも引きけり  
あさあけのおほらに澄める大天の光を浴びてわれしづかなり  
あけを降る雪はかなしもさ寢床のねざめにけぶるかるき雪の音

山茶花の赤きがちればみつ吸へる鳥はおどろきとび立ちにけり  
大天にかなしき音のぬしはたれ赤き椿の花ちりてきぬ  
いや高み杉の大樹の梢ゆ梢春の光のにはふなりけり  
新らしきブラットホームにひと送る春の夜風の身にしみにけり  
あひだれしひとははるばる旅立ちてうつつ思ひのなげきなるかな

しらぬ國君が古郷の野も山も春の光のおほらかならむ  
しみじみと遠居のひとをおもふ間にねやの臥戸のあけそめにけり  
忍ぶべう夜をふかぶかとふれる雨しげき思ひぞかなしかりけり  
故郷のいやはるけさを忍ばゆめ春の夜雨をねやに聞きつつ  
しみじみとしげきおもひに身をつつむさ寢床近く風渡るなり

黒髪をときもえやらずあさあけの高すむ空をながめたりけり  
朝夕にあかるき空をしのぶかな南の窓にはや梅咲きぬ  
かりそめとおもふもかなし旅なればはたいたつきの君にしあれば  
かりそめの別れなりとてなぐさむるひともいつしか遠みけるかも  
夕近く窓に見る灯のかなしけれ又逢ふ日をばゆめに祈らむ

とりどりの思ひ悩みを身にそへて秋の小鳥はわくら葉にすむ  
いつしんに念ずるこゝろたまゆらに消なば消なまき秋にあふかな  
世の底に思ひなげきを投げてわがいね侘ひたるに秋は夜長く  
世のねたみ身にそひくればわれも又女なるかや涙ぐましき

世のことに追はるゝまゝに黒髪はたゞむなしくも色あせにけり  
ことしげきおもひにひた暮れはててわれとみづからなげくこの秋  
この蝕める命のすゑに静かにもするどき光貫きにけり  
目にふるゝ耳に聞ゆるなべてものいまはかなしもこほろぎをきく  
秋なれば秋のままなるなげきかもさ庭の小草うす日吸ふごと

こすもすはわが忘らえぬ思ひもてひとりゆらげり月ほそき夜を  
陽は光り空は青かり祈るべきことあるさまにしゆるるるかな  
夕ぐれの林の落葉ほろろ散るよどむ心のためらひに似て  
かの森に陽はも沈づめばしみじみといまはすぎすく日をねぎらへり  
たちがたきひとすぢごとにおそ秋の朝げの風のひた吹けるかな

とのもをば吹く風さへも闇なればひときは身にはしみにけるかも  
夕ざればさすらひ心おしつつみ枯草原に霧のながるる  
外やみ吹く風のなかうつ雨の音しばしとてしもききにけるかな  
秋されば松の青さも心からうつろひそめぬ風のをなかに

つばくらめいまはいつこをかけるやと思ふ心に君はかなしき  
まひおつる雪のかずかず手にうけて消えずもあれと見入りたるかも  
一つらの鉢につらつら雪つもりしようびの青葉かゞやけるかも  
さくさくと雪ふみならし夕べくる君の足の音の消えずもあれな  
南天の實の赤さこそかなしけれ真白く雪のにほふ朝あけ

白雲のあまたかゝれる天の奥わがゆくはてのゐどころと見つ  
草はまだ芽の出ぬ原に一人きて小鳥の聲を聞きゐたりけり  
これやこのなげきしらずも群雀こゑをひそめてわたる夕空

草 笛 十一首

草笛をしづかにふきし村の子に道問ふ如き君のわりなさ

われありて生甲斐ありと言ふ人のありともみえず淋しき世かな  
ちらほらと水にほの見る灯の如く君の心のほのかなるかな  
逢はぬ日をしづかに思ふ今宵かな涙のかぎり君をたづぬる  
赤き花たゞ一本のしほらしさ若かりし日をなつかしみ見る  
今日も亦空はくもりて野邊の道物わびしさにひきがへる鳴く

人あらぬプラットホームの佗びしさよ風にとびゆくたんぽぽの花  
淋しさをいと親しげにいざなひぬ日の照る方に宙がへる鳥  
そとふるる花の蕾のもも色に春の思ひのくれなやむかな  
もえてゆく野邊の若草ふみにじるすがすがしさに涙ながるる  
いかなればかく淋しさの身には泌む春の日中の姿見の部屋

見あげたる大樹の上にさ霧たちさ霧のなかに星かゞやけり  
しみしみと降る雪なれば君とわれ言の葉もなき静けさにあり  
夕ざれば榛の梢をならす風かなしやわれは秋に涙す  
鳥ははや窓邊になくもわが心起さぬまでには疲れはてける

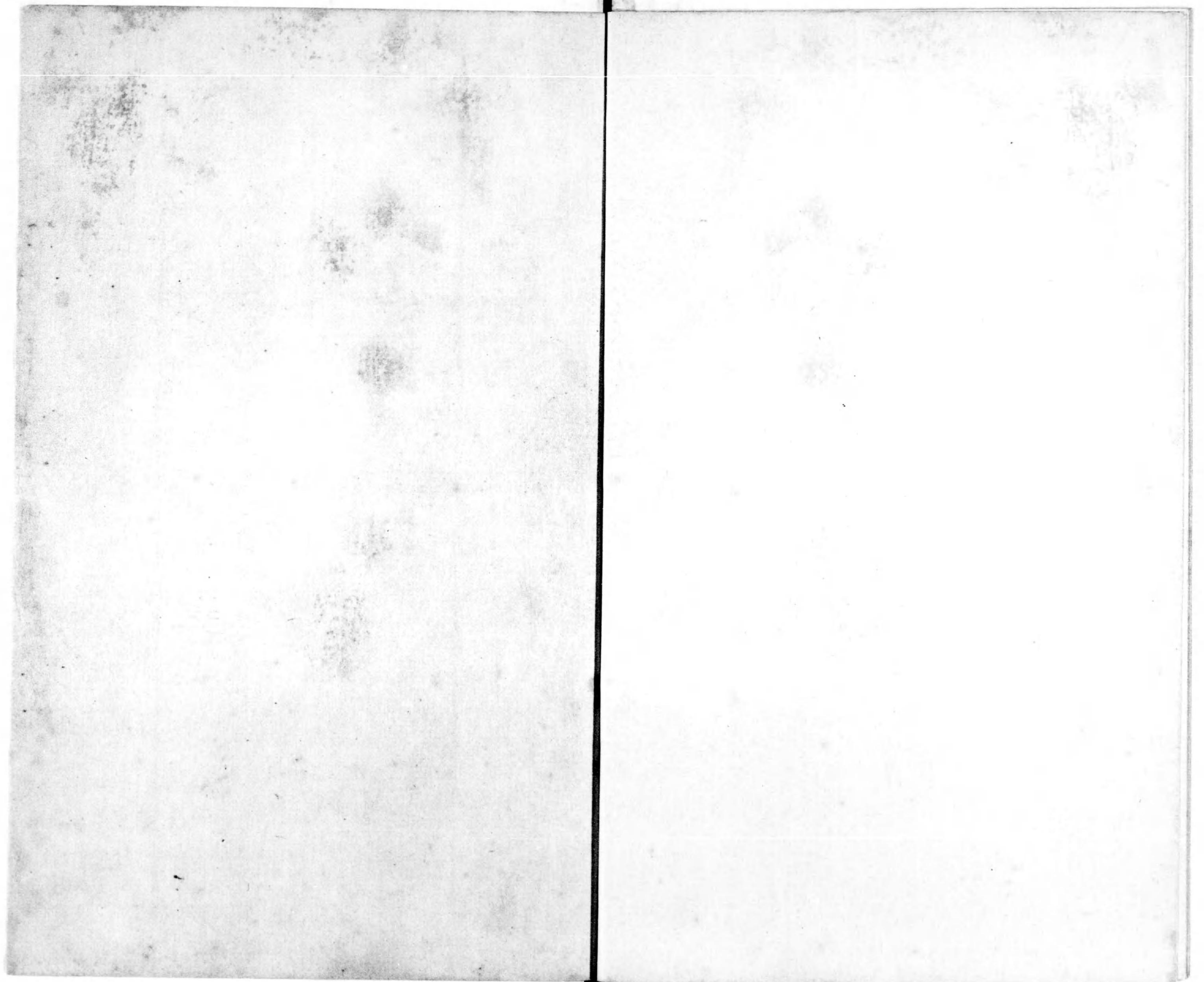
さ庭邊のうれがれそめしコスモスに霜月ひるの雨の小暗し  
秋深み空ゆく雲の夕ばへにときは樹の葉のかゞやけるかも  
さやさやに渡るこがらし時折は夜渡る鳥の羽音交ゆる  
まさやかに月の光のかゞやきて夜おく霜の見えわたるかな  
いささかのうたがひもなき君なるをなど泣くことおぼえそめけむ

ときわ樹の樹々の間を  
一列に少女歩ゆめり  
冬の日なかに  
この心つとさすごとく  
聞え來る鳥の鳴く音に  
澄める大空  
ひとすぢのなげきに  
睡ひたぬらし星なき空を  
仰ぎけるかも  
曇り日の空より洩るるひと  
あかりかげの如くも  
ときわ樹に映ゆ

大正四年六月三十日印刷  
大正四年七月五日發行  
定價四十錢

著者 谷元知安  
發行人 青陽社  
發行所 府下高田村雜司谷字龜原九ノ一六  
東京市牛込區水道町二十五番地  
印刷所 福山印刷製本所





270  
998

終